

主 題：幸福に降服する6

聖書箇所：マタイの福音書 5章7節

興味深いことに、映画などに描かれる日本人の姿は必ず同じような姿をしています。めがねをかけていて必ず首からカメラがさがっています。多くの人たちは帽子をかぶってほとんど同じ洋服を着ています。それがグループで行動していると間違いなく私たちはそれが日本人であると思います。アメリカ人から見ると、日本人というのはそのような印象があるのかもしれませんが。時々、私は教会の皆さんにこういう質問を受けることがあります。「先生、お宅ではお魚を食べられますか?」、それで私が答えることは「はい、うちは納豆も好きなんですよ」と、すると皆さん驚かれるのです。なぜなら、妻がアメリカ人だからです。つまり皆さんは、うちの家では和食はあまりないという印象をもっておられるようです。私たちはいろいろな面でそのような印象、イメージというものをもっています。こういう人にはこういう特徴があると。だから、警察官や政治家が何か道徳的な問題を起こすと、私たちは非常に騒ぎます。なぜなら、私たちはそのような職業に就く人たちはそういう非道徳的な問題を起こすべきではないという印象を持っているからです。私たちはある特定の期待というものを人々の上にもっています。その人の立場や状況、状態、また、その人たちの姿、かたち、そのようなことがらを通して、あの人はこういう人だと思うのです。イエスがこの至福の教えの中で教えていることもそれと大きな違いはないように思います。イエスはこのマタイの福音書5章で語られていることは、イエスの御国に属する人物、その国の国民たちはいったいどんな特徴をもっているのかということ、私たちに教えておられるのです。この天の御国に属する者たちは、彼らがこの国の国民であるがゆえに、特定の特徴を現わして生きているはずだと、イエスは言われるのです。イエス・キリストが為してくださった救いのみわざによって、私たちも実はこの御国に入る者となりました。パウロも言いました。ピリピ3：20「**けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。**」と。皆さんは、日本人であるとかアメリカ人であるとかという前に天国人なのです。なぜなら、イエス・キリストが皆さんを救ってくださり、天に国籍をもつ者になったからです。この事実は、私たちに非常に大切なことを教えます。イエスがここで言われている天国に属する人の特徴を私たちももっていなければいけないということです。そして、何よりもすばらしいことは、この天国に属する者であるなら、この人には祝福があるということです。「幸いなるかな」、幸福だということです。神の民となり、神の国に属する者になったことは、すばらしい祝福であるとイエスはそう宣言されるのです。そして、このような祝福にあずかっているゆえに、私たちはイエスが言われる特徴を身に付けて生きていなければいけません。そして、それは私たちが、この地上に生きている、地上に国籍をもっている者たちとは別のものへと私たちを区分して行くのです。私たちの新しい故郷は、私たちを新しいものへと変えるのです。

今朝、私たちは再びこの至福の教えを学んで行きます。今日はその5番目を見て行きます。このことを通して、私たちが願うことは、私たち一人ひとりが本当にこの天国に属する者としての特徴をしっかりと現わして生きているかどうかを、しっかりと吟味することです。もし皆さんが、私はクリスチャンであると言うなら、皆さんはイエスが語っているような特徴をもってこの地上で生きているはずですが。そうでないとするなら、私たちは自分の心をよく吟味しなければなりません。どうすれば、そのような者になって行くことができるのか、そのために、一生懸命働きかけて行かなければいけません。

☆至福の教え（天国民としての特徴）

5. あわれみ深い

7節「**あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。**」、これまで私たちは四つの祝福された人物、この天国に属する人の特徴を見てきました。1. 霊的な貧困を知っている。神の前に何一つ誇るものがないということをきちんと理解している人、私たちが神の前に出たときに、神さま、私はこんなにすばらしいものをもっているのです、と一つも言うことができないことをよく分かっている人です。全くの破綻した状態ですと、それが天国民の特徴でした。2. 悲しむ者。このような霊的な貧困をもたらしたその原因が、自分自身のもっている罪であることをよく分かっていたから、この人は自分の罪を嘆いていました。また、私たちの周りにあるあらゆる罪に対して、悲しみを覚えていたのです。そして、3. 柔和な者。このように罪深く、神の前に誇るものが何一つない、全く破産した状態であるがゆえに、私は良いものを受ける価値がないことをよく知っていました。だから、この人はへりくだっていたのです。たとえ、何が与えられたとしても、神さま、こんなすばらしいものをあなたが与えてくだ

さるとはなんて感謝なのでしょうと、神の前にへりくだっているのです。そして、それゆえに、同時に他の人に対しても優しく接して行く人、それが3番目の特徴でした。そして、4. 義に飢え渴いている。罪の中にあるから、神の正しさをもっていないがゆえに、それを恋焦がれて心からの飢えと渴きをもって追い求め続ける人です。今日、私たちは5番目の特徴をこのリストに加えて行きます。これも、他の四つと同様、私たちクリスチャンがもっているべきものです。イエスは言われます「**あわれみ深い者は幸いです。**」と。

1) 「あわれみ深い」とはどういうことか

「あわれみ深さ」ということは真のクリスチャンの特徴です。この特徴はこの当時の人々にはすばらしい特徴とは捉えられていませんでした。人々はあわれみ深さを尊ぶことは余りなかったのです。けれども、そのような文化的背景の中にあつて、事実、あるローマの哲学者はこの「あわれみ」ということに関して、「あわれみ」とはたましいの病であると言いました。つまり、歓迎されないものだったのです。そんな社会の中にあつて、イエスは「あわれむ者は幸いです」と言われたのです。では、いったいなぜ、この「あわれみ」が真のクリスチャンの特徴なのでしょう？まず、そのことをごいっしょに考えて行きたいと思います。

(1) 「あわれみ」とは何か

日本語の辞書では「あわれみ」ということばはこのように定義されています。「人の状態を見てかわいそうに思う、同情する、」と。確かに、私たちはこのような意味でこの「あわれみ」ということばを使います。ただ、それをそのまま聖書のことばを理解するために使うなら、余りにも十分ではありません。聖書がこの「あわれみ」ということばを使うとき、「聖書的なあわれみ」というのは単なる同情心ではありません。かわいそうに思うというその感情ではないのです。むしろ、このことばが聖書で用いられるときは、それは、外側に行動として現われる態度であるということが出来ます。それゆえに、新約聖書の中でこのことばが使われるときは、本来、「あわれみを見せる」と訳すことができるのです。また、そうであるべきではないかと思えます。どのようにして「あわれみ」を見るでしょう？同情心は見えませんが、あわれみが行動として現われるとき、それが見えるというわけです。ですから、私たちが聖書的なあわれみということを考えるとき、それは必要をもっている人に対して、具体的な助けを与えることによって、あわれみを示すということを語っているのです。あわれみとは、常に、人々の苦しみ、みじめさ、困難、不幸と関わりがあると、ある注解書は言います。そして、このあわれみはそのような困難な状況、苦しい状態が人生の様々な分野に起こってきたときに、あわれみをもっている人の行動にはっきりと示されるのです。人々は、特にクリスチャンは多くのときに、この「あわれみ」ということばと「恵み」ということばを混乱しています。確かに、聖書はこの二つのことばをよくいっしょの文の中で使ったりします。「恵み」と「あわれみ」が…と。この二つのことばが並べられているのは、確かに、この二つは似ていて近い部分も多くあるのですが、けれども、二つには違いがあることを私たちは覚えておかなければいけません。そして、「あわれみ」がどういうものなのかをよく理解するためには、この違いをよく知っておく必要があります。

先ほども言ったように、「あわれみ」というのは、常に苦しみやみじめさ、困難、不幸と関わりがあります。このような問題の根底にある原因を考えると、そこには一つのもので必ず出てきます。それは「罪」です。私たちのどのような苦しみ、困難、不幸、あらゆるものをとってもそうです。その根底にある究極的な原因は「罪」です。そうではないですか？なぜ、病気になるのでしょうか？不摂生ということもありますが、病気がある理由はアダムがエデンの園で罪を犯したからです。罪がなかったときには病気はなかったのです。人生の様々な問題、それは二つのうちのどちらかです。一つは自分が犯した個人の罪の報いであるか、または、この世界が罪に満ちているゆえの結果であるか。そして、この「あわれみ」はそのような罪が原因でもたらされた様々な問題に対して、働きかけるものなのです。ある注解者は「あわれみ」をこのように説明します。「『あわれみ』というのは、症状に対して効果を発揮するものである。苦しみという症状を取り除く働きを人々にする。それに対して『恵み』というのは原因に問題解決を与える。」と。あわれみが起こるとき、そこには必ず苦しみが見えます。そして、苦しみや困難、悲しみ、不幸、様々な必要がそこにあったときに、あわれみが働き、問題を取り除きます。それに対して恵みは、起こっている問題自体を取り除くのです。病気でたとえて言うなら、あわれみは症状を緩和する薬であり、恵みは病気を治癒する治療剤です。両方とも人を助ける働きをします。人を完全な状態へと近づけます。けれども、二つの役割は明らかな違いがあるのです。また、別の注解者はこれと別の見方をします。「『恵み』というのは愛を受けるにふさわしくない人たちに対して、愛が豊かに注がれることを表わす。それに対して『あわれみ』は苦しみをもっている人たちに対して、どうしようもない必要を抱えている人たちに愛が豊かに注がれることを表わす。」と。つまり、「あわれみ」ということばが使われるとき、そこには常に問題があるのです。苦しみや困難、様々な不幸があるのです。

「恵み」は価値のない者に対して与えられます。そして、「あわれみ」はみじめな者たちへの答えです。どちらの場合でも、特に新約聖書が「あわれみ」ということばを使うとき、私たちはそこに助けられなければならない苦しい状況を見ることができます。そして、この「あわれみ」はそのように苦しんでいる人たちに対して、その苦しみを解放させる具体的な助けを与える働きをするのです。

昨日の晩、このメッセージを頭の中で繰り返しながらふと一つのこと気付きました。その後聖書を調べてみました。皆さんはどうでしょう？少なくとも新約聖書には、私の知る限り、「恵みなさい」「恵みを与えなさい」という命令は出てきません。なぜでしょう？それは、私たちには問題を解決することはできないからです。でも、神は命じます、「あわれみなさい」と。私たちは苦しんでいる人たちを見て、その人たちを助ける働きはできます。このように違いがあります。イエスは言われます。天国に属する人は問題の解決をするわけではないけれど、問題を抱えている人たちに対して、その問題を和らげる、問題を解決しそこから立ち上がって正しい方向へと進んで行くことができる、その助けを与えることができるのです。それゆえに、私はあなたに同情しますというのは、聖書的なあわれみではありません。そのように感じるだけでは十分ではないのです。人々の必要を見たとき、人々が苦しんでいるところを見たとき、あわれみ深い人は具体的な助けをします。イエスは、天国に属する人はこのような特徴をもっていると言います。人々の苦しみ、困難、悲しみを見たときに、天国に属する人は単に彼らに対してかわいそうに思うだけでなく、そこからどのように助けることができるのかということを実践的に考え、実践する人です。それがイエスが天国に属する人に求めていることであり、また、それが私たちのあるべき姿であるということです。

具体的に考えて見ましょう。あわれみがどのようなものか分かりました。では、それは実際の生活の中でどのように現われるのでしょうか？三つの例を選びました。

(A) 良いサマリヤ人のたとえ ルカ 10 : 30 - 37

「:30 イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎとり、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。:31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。:32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。:33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、:34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。:35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』:36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」:37 彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」

ここでイエスは具体的に詳しく描写された「あわれみ」の姿を私たちに示してくれています。皆さんはこの話をご存じでしょう。三人目にやって来た人はサマリヤ人でした。サマリヤ人はユダヤ人と敵対関係にありました。そこで、イエスはあわれみがどのようなものかを私たちに具体的に示してくれます。どのようにあわれみが現わされたのか、四つの部分を見てみましょう。

(a) 問題をしっかり見る

困難をしっかりと把握し、それを見つめるものです。33節「**ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見て**」と、怪我人を見たのです。他の二人は彼を見て見ない振りをしたのです。あわれみ深い人はそこから目をそらさなかった、必要をはっきり見てどんな状況なのかをしっかりと判断してどのような助けをするのかをよく考えたのです。

(b) 心に深い慈悲の思い、同情、あわれみの心をもつ

同じ33節に「**彼を見てかわいそうに思い、**」とあります。彼はその状況をしっかりと見て、何と困難な苦しみに満ちた状況であるのかと心の中でしっかりとその思いをもったのです。先の祭司、レビ人ももしかすると、あそこで倒れている人がいる、何とかかわいそうに思ったかもしれませんが、彼らの同情は聖書的な同情ではありません。しかし、サマリヤ人はこの怪我人の状況をしっかりと見て、何とかかわいそうなど心からの同情をもち、それだけで終わらなかつた、次の行動へと移るのです。

(c) その心の思いは具体的な助けとなって現われる

彼は「:34近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。:35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』」と、必要な犠牲を自ら払ってこの人が困難な状況から解放されることをしたのです。あわれみは心に思っているだけでは十分ではない、それは聖書的なあわれみではありません。聖書的なあわれみは心にあるあわれみの思いがしっかりと行動となって現われるのです。

(d) 憎しみ、敵対心に関係なくあわれみを現わす

これが私たちにとって最も大切なことかもしれません。先ほども言ったようにサマリヤ人とユダヤ人は敵対関係にありました。祭司とレビ人はユダヤ人の中でも宗教家と言われる人たちです。祭司とレビ人とサマリヤ人、この中で強盗に遭ったユダヤ人を見てざまあ見ろと思いきや、サマリヤ人のはずです。けれども、そのような敵対関係にありながら、このあわれみはそのようなことに関係なくその人の必要を見たのです。具体的な必要があったのです。そして、私はその必要を満たすことができると知っていたから、その人は敵対関係の中にあっても具体的な助けを施すのです。あわれみとはどういうものか、ジョン・パイパーという牧師はこのようにを言います。「あわれみというのは、困難に対する目、同情の心、助けるという努力、それらが敵意の中にあっても為されることである。それが同情である。」と。確かに、サマリヤ人はそのようにこのユダヤ人に対してあわれみを示しました。

イエスはこのようにたとえ話をされましたが、それには理由があります。その理由がこのルカ 10 : 25 から書かれています。実は、律法の専門家とのやりとりがあったのです。「**1:25** **すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」** :26 **イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどうか読んでいますか。」** :27 **すると彼は答えて言った。「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。」** :28 **イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」** :29 **しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」**、律法の専門家は「**先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。**」と救いのことを尋ねます。イエスとの問答はその後に書かれています。いのちを得ている人とは、神を愛し隣人を愛する人、永遠のいのちは神を愛し隣人を愛する人に与えられると。この律法の専門家は尋ねます。「では、いったいだれが隣人ですか？」と、そこでイエスはこのたとえ話をされるのです。このたとえ話の最後にこのようなことばが記されています。10 : 36 **「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」** :37 **彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」**、イエスのたとえ話の中で「あわれみ」ということばは出てきませんでしたが、このサマリヤ人の行為があわれみであったことは明らかです。だれが隣人だったのでしょうか？あわれみをかけた人です。隣人を愛する人は永遠のいのちをもっている人です。だから、イエスはマタイ 5 : 7 で言ったのです、「**あわれみ深い者は幸いです。**」と。なぜなら、それは天国に属する人の特徴なのです。

(B) イエス・キリストご自身

イエスご自身もあわれみをしっかりと私たちに現わしてくださるすばらしい模範でした。まさに究極の模範といってもいいでしょう。イエスは自らの手を伸ばして病に冒されている人たちを癒しました。彼は歩くことができない者たちの足を強め、見ることができない者たちに光を与え、聞くことができない人たちに音を与えました。そして、いのちのない者たちにいのちを与えたのです。福音書を見て行くと、ガリラヤ地方には病人がいなくなったという記事が出て来ます。イエスはどんなに忙しいときでも連れて来られる必要をもっている人たちに対して、あわれみの心を閉ざさなかったのです。手を差し伸べてその必要を満たし続けたのです。私たちがそのことを何よりも知っています。なぜなら、私たちがもっている一番の必要をイエスは満たしてくださったからです。私たちが、神さまあわれんでくださいと言ったとき、この方は私たちに手を差し伸べることを止めませんでした。マタイはこのイエスとユダヤ人のやりとりを幾つも記しています。その中の一つに非常に興味深い記事があります。イエスがある日、取税人や多くの罪人たちといっしょに食事をしていました。すると、ユダヤ人のリーダーたちが弟子たちに向かって「**なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人といっしょに食事をするのですか。**」と、マタイの福音書 9 : 11 に記されています。すると、「**1:12** **イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。:13** **『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」**と答えておられます。イエスのご自分の周りに集まってきた罪人たちの人生における様々な不幸や苦痛、彼らの霊的な貧困を見て取られたのです。彼らは病の床にあったのです。そして、イエスは彼らを癒すことができたのです。それゆえに、イエスはパリサイ人たちといっしょになってこのようには言わなかったのです。「わたしに近づくな、あなたがわたしに近づいてきたらわたしもあなたによって汚れるから、わたしから離れよ」と。パリサイ人たちやユダヤ人のリーダーたちが考えたのはこのことです。彼らは表側の小さなルールに捉われて、それさえしっかり守っていれば神に喜ばれると考えたのです。しかし、神が求めているのはあわれみの心でした。イエスはここでホセア書 6 : 6 のことばを引用されています。「**わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ。**」、当時のイスラエルは神の前に全く空しい、心の伴っていないいけにえをささげていたのです。そこで、神はそんな表面的な行為をわたしは一切喜びません、わたしが求めているのはあわれみの心だと言われるのです。イ

エスはこのパリサイ人たちに非常に厳しい呪いのことばをかけます。その中の一つ、マタイ 23 : 23 「**忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、すなわち正義もあわれみも誠実もおろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、他のほうもおろそかにしてはいけません。**」と、律法学者たちはこのような細かい律法を一生懸命守ろうとしていましたが、彼らはそれゆえに、本当に大切な心の態度を忘れて、それを持たずに神の前に出ることができると考えたのです。イエスはあわれみの生涯を送られました。そして、私たちにあわれみ深い者がどのような者であるかを、模範として示されたのです。皆さんはそのようにあわれみを示されますか？いろいろなことが気になって、それを守ることのほうが大切だから、本当の必要を無視して、いや私にはそれはできませんと言われますか？そういう小さなことがらを守ることも大切だとイエスはマタイ 23 : 23 で教えていました。「**他のほうもおろそかにしてはいけません。**」と、けれども、大切なことはあわれみの心を持つことだと言います。

(C) 罪を赦すためにイエスがなされたこと

そのあわれみの最も最たるものは神によって私たちに示されました。私たちの罪を赦してくださるといふその行為によって…。テトスへの手紙 3 : 5 でパウロは言います。「**神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救って下さいました。**」と、神は「**聖霊による、新生と更新との洗いをもって**」私たちを救ってくれました。それは何のゆえにでしょうか？「**ご自分のあわれみのゆえに**」です。神のあわれみによって私たちは救われたのです。私たちが勘違いしてはいけないことは、あわれみというのは単に何か具体的な必要をもっている人たちに対して、その必要を満たしてあげるといふその行為にだけ現わされるのではないのです。あわれみの最も大きな現われは、神が私たちの罪を赦して下さったというところにあるのです。あわれみは罪の赦しと密接な関係があるのです。罪があるとき、あわれみ深い人は罪を犯した人を赦したいと心から願って、その人に働きかけます。それがあわれみ深い人です。イエスはこんなたとえをマタイ 18 : 23 から話しています。皆さんよくご存じのところですが、王様に多くの借金をしているしもべがいます。そのしもべは王様から借金の請求をされるのですが、一生かかっても返すことができないほどの額の借金です。返すことはできません、どうぞ、赦して下さいとしもべは願うのです。王様はそのしもべをあわれに思ってその借金を赦すのです。ところが、借金を赦されたしもべは王様のもとから出て行くとすぐに、今度は自分に対して借金をしている人を見つけるのです。返すことができる額です。もう少し待って下さいと願うその人に対して、しもべは待てないと、借金を返すまで牢に投げ入れたのです。それを聞いた王様はしもべを呼びつけてこのように言います。33-35節「**私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。**」:34 こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。:35 「**あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。**」と。神はご自身のあわれみのうちに人の必要を見られました。私たちが罪のうちに捉われて永遠ののろいを受けるにふさわしい者だと、その苦しみを問題を神はご覧になりました。そして、神は内側においてあわれみの思いをもたれたのです。かわいそうに、そんな苦しみは与えたくない。そして、その内側の思いが外側の行動になって現われました。私たちの問題を解決するために、御子イエス・キリストを私たちのために遣わして下さいました。イエスがそのように送られてきたのは、私たちがまだ罪人であったとき、神に敵対していたときです。もし、それを受けたのなら、あなたは同じように人を赦そうとしていますかと、イエスは言われます。もしイエス・キリストによってこのようなあわれみを知ったなら、私たちがその同じあわれみを他の人たちに示す責任があるのです。私たちが赦されたように私たちも他の人たちを赦さなければいけません。イエスはルカ 6 : 36 で「**あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。**」と言われました。それが私たち天国民のあり方なのです。人が罪を犯しているとき私たちは何をするのでしょうか？罪を知っていてそれに目をつぶっているなら神からのさばきを受けます。私たちがその人が問題を解決できるように、その人が悔い改めて神のもとに立ち返ることができるように、具体的な助けを与えようとしています。あわれみ深い人は人の罪を放っておけないのです。自分が正しいからではないのです。自分も間違っていることは分かっています、自分も神からあわれまなければならない者だということを知っています。こんな汚れた者がどうして神から恵まれあわれまれるのか分かりません。でも、神はこのような者を救って下さったのです。だから、私たちは、私も間違っている、けれども、あなたも間違っている、その間違いに神は解決の方法を与えて下さっている、私もそれを受けたから、あなたにもその解決を得てほしいのだとして、兄弟姉妹のところに行くのです。その人の罪がたとえどんなに小さな罪であったとしても、その罪を継続的に犯しているのを見たとき、私たちがその人がそこから立ち返るように働きかけるのです。エペソ人への手紙 4 : 32 に「**お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦して下さったように、互いに赦し合いなさい。**」とある通りです。

あわれみ深い人とはどのような人か、このように見てきましたが具体的に見えてきたでしょうか？もったくさんの例がありますが、一つ忠告させてください。皆さん、あわれみがないことはそんなに大したことではないと思われるかもしれませんが。皆さんの中には、私は何とあわれみのない者でしょう、神さまどうぞ、あわれむことができるように助けてくださいと願ったことがない人がいるかもしれません。でも、あわれみがないことはとても大変なことです。みことばを見てください。ローマ1：29-31には神が忌み嫌う罪が列挙されています。「**彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、³⁰ そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、³¹ わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。**」、この最後に「**慈愛のない者**」、あわれみのない者と言われています。また、ヤコブはヤコブの手紙の中でこのように言っています。2：13「**あわれみを示したことののない者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。**」、皆さんはあわれみのないさばきを受けるために神の前に立ちたいでしょうか？ヨハネはこんなことを言います。Iヨハネ3：17「**世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。**」と、あわれみのない人には神の愛もないというのです。皆さんの特徴はあわれみ深い者でしょうか？皆さんは人の必要を見てそれを助けたいと心から願うでしょうか？助けることができるかどうかと考えますか？それとも、みなさんはパリサイ人たちのように、私は汚れたくないから、私はこのことを守らないからと言って、あわれみの心を閉ざしますか？皆さんは、レビ人や祭司のように見て見ない振りをして、だから、私はあわれまなくてもいいと考えておられますか？それとも、私たちに対してあわれみの心を豊かに示してくださった神のように、人に対してあわれもうとされますか？

2) なぜ、あわれみ深い人が幸いなのか

イエスはこのマタイ5：7で「**あわれみ深い者は幸いです。**」と言われました。その幸いであることの原因、もうすでに私たちはそれを見てきました。それは、私たちがそのあわれみを受けているからです。イエスは言われました、7節の後半で「**その人はあわれみを受けるからです。**」と。いつ受けるのでしょうか？天に入ってからではありません。天ではもう苦しみも悲しみもないからです。天国に入るに当たって、つまり、神のさばきの座に立つときです。イエスはここであなたがあわれんだならあなたもあわれまれますよということを言っているわけではありません。後半部分は幸いであることの原因、その理由を言っているのです。なぜ、幸いなのか、神があなたをあわれんでくださるからあなたは幸いであるということです。

皆さんはこの幸いにあずかっています。クリスチャンである皆さんは確かにこのあわれみを受けています。それなら、皆さんはあわれむ者という特徴をもっているのです。もし、ここにおられる皆さんを映画に登場させるとするなら、ハリウッドの映画家たちは、皆さんにめがねをかけさせ帽子をかぶらせ、カメラをもたせ、同じ服装をしてグループで行動させることをしません。皆さんはもう日本人ではないのです。それが皆さんの最たる特徴ではないのです。皆さんの最たる特徴は天国民の特徴です。だから、もし皆さんが映画に登場するとするなら、皆さんは必要のある人のところに行ってその必要を満たそうとしている姿が描かれるはずで、皆さんの周りには皆さんを見て、あの人は何とあわれみ深い人かと、そう思われるでしょう。神は皆さんがもうすでに幸いを得ている、もうあわれまれているからと言います。それなら、このような特徴を身に付けて私たちはこの人生を生きて行きたいと思えます。詩篇112：5「**しあわせなことよ。情け深く、人には貸し、自分のことを公正に取り行なう人は。**」